

東京音楽大学リポジトリ

Tokyo College of Music Repository

Transformation of "Twinkle, twinkle, little star"

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-06-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 安並, 貴史, Yasunami, Takashi メールアドレス: 所属:
URL	https://tokyo-ondai.repo.nii.ac.jp/records/1289

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



「きらきら星」の変容

安並 貴史

Transformation of "Twinkle, twinkle, little star"

Takashi YASUNAMI

序

「きらきら星」は現在、日本国内でも世代を超えて認知されている旋律の一つである。幼児教育をはじめとして様々な場面で使われているこの旋律は、一体どこから生まれてどのような広がりを見せたのか。今回はクラシック音楽を軸に、その変容を辿る。

私が研究している音楽家であるドホナーニ・エルネー Dohnányi Ernő(1877-1960) の作品の中に、ピアノ協奏曲のスタイルで書かれた音楽があった。それが「ピアノと管弦楽のための童謡主題による変奏曲 ハ長調 作品 25」である。この曲は「きらきら星」の旋律を主題として展開する音楽であり、私はこの曲を聴いて「きらきら星」に興味を抱いた。また、子供の音楽教育現場やピアノ初心者のテキストにも、この旋律は頻繁に現れる。音楽教室で働く者として子供と接する中で、この旋律に対する知識を拡大する必要性を感じたのである。ドホナーニはどうしてこの旋律を用いたのか、また、どのように変奏したのか。これらを探りたい。

1. 「きらきら星」の誕生

きらきら星の旋律の誕生は 18 世紀半ば、1740 年頃と推定されている。作者は現在も不明のままである。このことは、1761 年にフランスのパリで出版された、『Les Amusements d'une Heure Et Demy (一時間半の楽しみ)』という楽曲集が裏付けとなっている。この楽曲集は、その当時の流行であった旋律を寄せ集めた本であり、そこにきらきら星の旋律も記されていた。つまり、最初に出版されたものに歌詞は付いていなかった。この本が市場に出回り、人は様々な歌詞をその旋律に乗せて演奏したのである。

この本が出版された後、フランスで「Ah! vous dirai-je, maman (ああ、お母さん、あなたに申しませう)」というシャンソンが大流行した。以下はその歌詞である。

【歌詞】

Ah ! vous dirai-je, maman,
Ce qui cause mon tourment ?
Depuis que j'ai vu Clitandre,

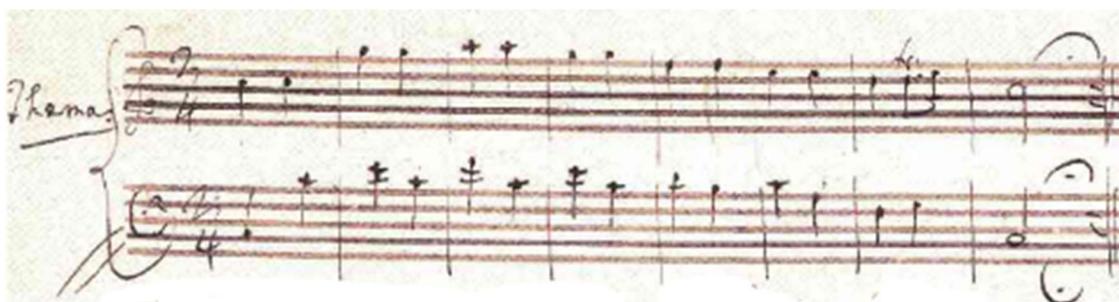
【意識】

ああ！ママ、言わせて
私の苦しみの原因はなんなの？
優しい Clitandre (人名)

Me regarder d'un air tendre ;	そんな彼と出会ってから
Mon cœur dit à chaque instant :	私の心はいつも語りかけるの
« Peut-on vivre sans amant ? »	「恋人なしで生きることはできるの？」と

勿論、旋律は我々が知る「きらきら星」である。以上のように、女の子が母親に恋の悩みを打ち明ける内容であり、恋の歌としてフランスで流行した。作詞が誰であるかは不明のままである。

そして 1778 年に、W.A.モーツァルト Wolfgang Amadeus Mozart (1756-1791) によるピアノ曲、「Variations on "Ah vous dirais-je, Maman" K. 265 / K. 300e (フランスの歌曲「ああ、お母さん、あなたに申しませう」による 12 の変奏曲)」が作曲された。今日、我々が最もよく聴く変奏曲の 1 つと言っても過言ではない名作である。以下はその自筆譜である。



天才作曲家のモーツァルトが数ある旋律から選んだことから、「Ah vous dirais-je, Maman」が当時の流行であったことが分かる。モーツァルトは、当時の誰もが知る旋律とピアノの技巧とを混ぜ合わせた作品を作り上げた。

2. 他国における「きらきら星」の普及

ここまではフランスにおける話である。それでは近隣の国々ではどのような普及があったのか。

1805 年にイギリスで、詩集「ナーサリーライム (Rhymes for the Nursery)」が出版された。その中に、詩人ジェーン・テイラー Jane Taylor(1783-1824) の詩「The Star」が収録されており、イギリスではきらきら星の旋律にのせる歌詞にこの一部が用いられた。以下、「Twinkle, twinkle, little star (きらめく小さなお星様)」の歌詞である。

【歌詞】

Twinkle, twinkle, little star,
How I wonder what you are!
Up above the world so high,

【意訳】

きらめく、きらめく、小さな星よ
あなたは一体何者なの？
世界の上空はるかかなた

【歌詞】

霞か雲か はた雪か とばかり匂う その花ざかり 百鳥さえも 歌うなり

その後「春の訪れ」は 1892 年（明治 25 年）に幼稚園唱歌として、小鳥を題材とした『小鳥の歌』として出版されている。作詞は大和田建樹(1857-1910)である。歌詞は以下の通りだ。

【歌詞】

小鳥の歌は いとも楽し 野にも山にも ひびきわたる うぐいすひばり こゑを限りに

「霞か雲か」と「小鳥の歌」は、旋律やリズムが「春の訪れ」と全く同じであることから、現在では「きらきら星」とは別物として扱われている。どちらにせよ、幼い子供を対象とした場合では、この 2 曲の内容はやや渋いと考えられる。

4. その他の引用例

クラシック音楽で「きらきら星」の旋律が使われている作品は多くはない。1792 年に F.J. ハイドン Franz Joseph Haydn(1732-1809)が『交響曲第 94 番 驚愕』第 2 楽章 (Andante) で、1886 年にサン＝サーンス Charles Camille Saint-Saëns(1835-1921) が『動物の謝肉祭』第 12 曲「化石」(Fossiles)で、そして 1914 年にドホナーニが「ピアノと管弦楽のための童謡主題による変奏曲 ハ長調 作品 25」で用いた。

ドホナーニのこの作品は彼がベルリン高等音楽学校で教鞭をとっていた時代の作品である。曲の構成は以下の通りだ。

- 序奏 : Maestoso 壮大なオーケストラ ホルンによる童謡主題の暗示
テーマ : Allegro ピアノによる童謡主題の提示
第 1 変奏 : Poco piu mosso ピアノによる 3 連符の技巧的変奏
第 2 変奏 : Risoluto 金管楽器とピアノの掛け合い
第 3 変奏 : 優雅なアルペジオの上に夢見のような弦楽器
第 4 変奏 : Molto meno mosso 木管楽器とユーモラスで楽しげな変奏
第 5 変奏 : Piu mosso 鐘の音やハーブと共にオルゴール風
第 6 変奏 : Ancora piu mosso ピアノの 3 度音程のスケールやトレモロ、技巧的見せ場
第 7 変奏 : Walzer/Tempo giusto 第 3 変奏のように弦楽器と共に優雅な 3 拍子
第 8 変奏 : Alla marcia 4 拍子に戻るが行進曲風
第 9 変奏 : Presto 8 分の 3 拍子、魔法使いの弟子のような印象 – Andante rubato
第 10 変奏 : Passacaglia/Adagio non troppo 悲愴感や哀愁漂う抒情的な変奏
第 11 変奏 : Choral/Maestoso 長い短調を抜けハ長調に到達。童謡主題そのものに戻った
フィナーレ : Fugato/Allegro vivace 駆け回るフーガを経て、主題を完全に再現して終わる

この作品の大きな特徴として、モチーフをただ変奏しているだけに留まっていないことが挙げられる。各変奏の中には、クラシック音楽の他の作曲家の作品を想起させるような音

楽に作り上げられていることが聴き取れる。この曲の分析は膨大であり今後の課題の一つではあるが、単なる「きらきら星」の変奏と言い難いところにドホナーニのオリジナリティが潜んでいる。

結論

今日我々が認識する「きらきら星」は約 300 年という時間の中で、人々の伝播により旋律、リズム、歌詞、語法を様々に変容させていたことが分かった。現在では例えば、アルファベットを覚える為の「ABC の歌」の旋律としても世界中で普及している。我が国の「きらきら星」という固定観念や、学習の為の「ABC の歌」が、300 年後に全く同じ形で存在しているだろうか。もしくは変容しているであろうか。長い時間を経て日々変化している人間だからこそ、未来にどのような形となるかは想像を超えている。私の生涯の中では大きな変化は起こらないかもしれないが、「きらきら星」の使われ方や社会における位置付けには、今後も細かい注意を払って追っていきたい。

参考文献

Grymes, James A.

2001 Ernst von Dohnanyi A Bio-Bibliography. (Westport: Greenwood Press)

間宮 芳生

1960 「音楽芸術 8 号」『ブラームスの変奏法』

西原 稔

2006 「ブラームス」音楽之友社

Mintz, George Jacob

1976 Textual patterns in the solo piano music of Ernst von Dohnanyi. Florida State University, PhD.

<http://www.worldfolksong.com/index.html>

<http://www.geocities.jp/ezokashi/index2.html>